



Title	慣用表現から見た「気」と「心」の意味領域の共通点と相違点について
Author(s)	オトゴンジャルガル, ドルギオン
Citation	日本語・日本文化研究. 2023, 33, p. 114-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95379
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

慣用表現から見た「気」と「心」の意味領域の共通点と相違点について

オトゴンジャルガル ドルギオン

1. はじめに

日本語には人の精神や気持ちを表す語として「気」と「心」がある。これらの語の意味は相違する一方で重なっている点もある。例えば、『広辞苑』（第六版）（以後【広】）には人間の精神に関する「気」の定義として 8 項目が挙げられているが、これらのうち 4 項目に「心」という語が含まれており、その中でも 2 項では「気」の定義自体が結局「心」となっている。また、『明鏡国語辞典』（第二版）（以後【明】）には、名詞としての「気」の、人間の精神に限らない全般的な定義として 10 項目が挙げられているが、そのうちの 5 項目に「心」という語が含まれている。つまり、合わせて 18 項目のうち 9 項目が「心」を含んでいる。

(1) 「気」の定義で「心」を含む項目

- a. 事に触れて働く心の端々。【広】
- b. あることをしようとする心の働き。つもり。【広】
- c. あることをしようとしてそれに引かれる心。関心。【広】
- d. あれこれと考える心。【広】
- e. 生命力や活力の根源となる心の働き。【明】
- f. 外界を知覚する心の働き。意識。【明】
- g. その人が生来もっている心の傾向。気質。【明】
- h. 物事に反応する心の働き。物事に反応して変化する心の状態。気分。気持ち。【明】
- i. 物事についてあれこれ考える心の働き。【明】

逆に、人間の精神に関わる「心」の定義として【広】には 7 項目、【明】には 6 項目がある。そのうち、「気持ち」という語を含んだものがそれぞれ 1 項目見られるが、単独の「気」を含むものはない。

(2) 「心」の定義で「気持ち」を含む項目

- a. 気持。心持。【広】
- b. 偽りや飾りのない本当の気持ち。心底からの思い。本心。【明】

上記 (1) 及び (2) から、「気」から見れば「心」は見えるが、「心」から見ても「気」は見えないものなのかという疑問が生じる。このように、「気」と「心」には似通っている部分も、相異なる部分も観察されるが、具体的にどのような点で類似あるいは相違しているか

については必ずしも明らかではない。谷口（2003）は「気」と「心」が形容詞を伴って成すコロケーションを対象に意味分析を行い、「「気」と「心」は、形や大きさ、重量感、強度、固さなどの有無において一応共通しているといえるが、たとえば同じ大きさでも「心」の方は「広さ」や「深さ」を伴い、より立体的な広がりを感じさせるなど、その空間的な特徴にも微妙なニュアンスの差が感じられる」と主張している。また、課題として「今後「気」と「心」の意味分析をより精密に行うためには、慣用句も含め、より広範囲な語との組み合わせをみていく必要があるであろう」と述べている。そこで、本稿では「気」と「心」の意味領域を、慣用表現を通じて考察し、その共通点と相違点を明らかにすることを試みる。考察の対象とするのは Otgonjargal（2023）で扱われたものを中心に「気」を含む慣用表現 87 句と「心」を含む慣用表現 77 句である。

2. 慣用表現における「気」の意味領域

本節では「気」を含む慣用表現を考察し、当該表現において「気」が担っていると考えられる意味を抽出する。具体的には、慣用表現における「気」の役割を考察した上でその「気」が単独で表す意味をカテゴリー化する。

分析は次のように行う。まず、慣用表現における「気」の担う意味を示唆する語（「心」を除く）を各辞書による定義の中から抽出する。定義にそのような語が見られない場合は、定義全体や集めた用例の主要傾向などに基づき、「気」に代わりうる語（意味領域のカテゴリー）の候補を選定する。次に、その語を慣用表現にある「気」と置き換えた場合、もとの文の意味と同等であるかどうかを考察する。複数の用例において「気」を仮定の語に代えてももとの文の意味と同等である場合、その仮定の語を「気」の意味領域の一つのカテゴリーとする。カテゴリー化に当たり、類義語はできるだけ一つの意味領域としてまとめる。

以下、分析過程の例を示す。【 】は用例と定義出典の略（本稿末に掲載）である。

慣用句《気が多い》の分析：

①定義と「気」と代わりうる語

- a. 心が定まらないで、移りきであるさま。いろいろな物事に興味を持つさまである。うわきであるさま。【日】→「興味」「うわき」
- b. 心が定まらず、関心や興味がいろいろに変わる。【デ】→「関心」「興味」
- c. あれこれと気を引かれるものが多い。移り気である。【広】→×

「気」と代わりうる語：「興味」「うわき」「関心」

②用例での置き換え

用例：気が多くて何にでも手を出す。【デ】

- a. 興味が多くて何にでも手を出す。○
- b. うわきが多くて何にでも手を出す。×
- c. 関心が多くて何にでも手を出す。○

③考察とカテゴリー化

②a.と②b.は、もとの慣用句の用例の意味とほぼ同等である。しかし、②a.の「興味」については、「関心」よりも狭義で使われることが多く、「気が多い」が他の文脈・用例でも使用されることを想定して、より広義である「関心」のほうを選定する。従って、慣用句「気が多い」における「気」の意味カテゴリーとする。

慣用句《気を失う》の分析：

①定義と「気」と代わりうる語

- a. ①しようとする意欲をなくす。気落ちがする。志気沮喪する。気を取り失う。②意識をなくす。失神する。気を取り失う。③死ぬ。【日】→「意欲」「志気」「意識」
- b. ①意識を失う。気絶する。②意欲を失う。気落ちする。【デ】「意識」「意欲」
- c. ①意気沮喪する。②意識がなくなる。失神する。【広】「意気」「意識」

「意欲」「志気」「意気」の3語は類義語であるため、「意欲」にまとめ、「気」と代わりうる語の候補は「意欲」と「意識」の2語とする。

②用例での置き換え

用例 1：どんなに頑張っても、あの天才的な選手にはかなわないと悟った時、僕は水泳を続ける気を失ってしまった。【こ】

用例 2：溺れている人を見つけて助けたが、気を失っていたのが幸いして水は飲んでいないようだが、目を覚まさない。【こ】

- a. どんなに頑張っても、あの天才的な選手にはかなわないと悟った時、僕は水泳を続ける意欲を失ってしまった。○
- b. どんなに頑張っても、あの天才的な選手にはかなわないと悟った時、僕は水泳を続ける意識を失ってしまった。×

- c. 溺れている人を見つけて助けたが、意欲を失っていたのが幸いして水は飲んでいないようだが、目を覚まさない。×
- d. 溺れている人を見つけて助けたが、意識を失っていたのが幸いして水は飲んでいないようだが、目を覚まさない。○

③考察とカテゴリー化

②b.と②c.からはもとの用例の意味を読み取るのが難しいが、②a.と②d.については、慣用句の用例の意味と完全に同等である。つまり、「気を失う」における「気」は明らかに異なる 2 つの意味を担っていると考えられる。従って、慣用句「気を失う」における「気」の意味カテゴリーは「意欲」と「意識」の 2 語とする。

このようにして、「気」を含む慣用表現 87 句を分析した結果、「気」の意味領域として計 23 のカテゴリーが抽出された。「気を失う」のように、異なる二つの意味を表す表現が 4 句あるため、「気」の意味カテゴリーとなる語の総数は $87+4=91$ となっている。

表 1 慣用表現における「気」の意味

	カテゴリー	個数	割合	慣用表現
1	心情	23	25.3%	気が重い、気を紛らわす、気に病む、気を楽にするなど
2	気持ち	12	13.2%	気が腐る、気が沈む、気が済む、気がせく、気が張るなど
3	注意	10	11%	気が散る、気が付く、気を付ける、気を取られるなど
4	気分	7	7.7%	気が進まない、気が高ぶる、気が抜ける、気が休まるなど
5	配慮	5	5.5%	気が利く、気が回る、気を利かせる、気を配る、気を遣う
6	意欲	4	4.4%	気がある、気がする、気が向く、気を失う
7	関心	4	4.4%	気がある、気が移る、気が多い、気がない
8	意識	3	3.3%	気を失う、気がつく、気を確かに持つ
9	気性	3	3.3%	気が勝つ、気が強い、気が弱い
10	好み	3	3.3%	気に入る、気に食わない、気に召す
11	こだわり	2	2.2%	気にする、気になる
12	自信	2	2.2%	気が小さい、気が引ける
13	良心	2	2.2%	気が差す、気が咎める
14	活気	1	1.1%	気を取り直す
15	感覚	1	1.1%	気がする
16	気合	1	1.1%	気を入れる
17	期待	1	1.1%	気を持たせる
18	希望	1	1.1%	気を落とす
19	興奮	1	1.1%	気を静める
20	実力	1	1.1%	気を吐く
21	心的禁断領域	1	1.1%	気に障る
22	性格	1	1.1%	気が合う
23	望み	1	1.1%	気が変わる
24	用心	1	1.1%	気が置けない
		91	100%	

表1、つまり、今回調査した慣用句の用例から明らかになったことは次の通りである。上位の4語、すなわち、「心情」「気持ち」「注意」「気分」が意味領域の57.1%を占め、慣用句全体の半数以上（数えて52句）における「気」の意味カテゴリーとなっている。それらに続き、複数の慣用句の意味カテゴリーになっているのが「配慮」「意欲」「関心」「意識」「気性」「好み」「こだわり」「自信」「良心」の9語である。これら1番から13番までで、意味領域の88%を占めており、数えて91句中80句の「気」の意味カテゴリーとなっている。残りの14番～24番のカテゴリーはそれぞれ1つの慣用句の意味になっているだけで、「気」の意味領域においては周辺的なものと言えよう。

3. 慣用表現における「心」の意味領域

本節では「心」を含む慣用表現を考察し、当該表現において「心」が担っていると考えられる意味を抽出する。考察・分析方法は、「気」を含む慣用句の場合と同じである。「気」の場合と同様、「心」の担う意味を示唆する語（意味カテゴリー）を選定する際は「気」を除く。以下、分析過程の例を示す。

慣用句《心を合わせる》の分析：

①定義と「心」と代わりうる語

- a. 大ぜいが心を一つにして協力する。【デ】→×
- b. 皆が気持を同じ目的に向けて協力し合う。また、しめし合わせる。共謀する。【広】→「気持」
- c. 気持を一つにする。【コ】→「気持」
- d. 気持ちを一つにする。協力し合う。【こ】→「気持ち」

「心」と代わりうる語：「気持ち」

②用例での置き換え

用例1：心を合わせて仕事に取り組む【デ】

用例2：全員が心を合わせて、新機種の開発に取り組む。【コ】

用例3：言葉を交わす暇もなかったが、言葉を発せずとも、みんなは一つの身体のように心を合わせて働いたのだった。【こ】

- a. 気持ちを合わせて仕事に取り組む○
- b. 全員が気持ちを合わせて、新機種の開発に取り組む。○

c. 言葉を交わす暇もなかったが、言葉を発せずとも、みんなは一つの身体のように気持ちを合わせて働いたのだった。○

③考察とカテゴリー化

いずれの例も、もとの慣用句の用例と同等の意味を表している。従って、慣用句「心を合わせる」における「心」の意味カテゴリーは「気持ち」とする。

慣用句《心を寄せる》の分析：

①定義と「心」と代わりうる語

- a. ①思いをかける。好意をいただく。②関心を持つ。熱中する。傾倒する。【デ】→「思い」「好意」「関心」
- b. ある人または物が好きになる。思いをかける。【広】→「思い」
- c. ①好意を抱く。②関心をもつ。傾倒する。【明】→「好意」「関心」

「思い」と「好意」を「愛情」にまとめ、「心」と代わりうる語の候補は「愛情」「関心」の2語とする。

②用例での置き換え

用例1：級友の一人にひそかに心を寄せる【デ】

用例2：天文学に心を寄せる【広】

- a. 級友の一人にひそかに愛情を寄せる○
- b. 級友の一人にひそかに関心を寄せる▽
- c. 天文学に愛情を寄せる×
- d. 天文学に関心を寄せる○

③考察とカテゴリー化

②b.と②c.はかなり不自然であるが、②a.と②d.は、もとの慣用句の用例の意味と完全に同等である。つまり、「心を寄せる」における「心」は異なる2つの意味を担っていると考えられる。従って、慣用句「心を寄せる」における「心」の意味カテゴリーは「愛情」と「関心」の2語とする。

このようにして、「心」を含む慣用表現 77 句を分析した結果、「心」の意味領域として計 21 のカテゴリーが抽出された。「心を寄せる」のように、異なる二つの意味を表す表現が 3 句あるため、「心」の意味カテゴリーとなる語の総数は $77+3=80$ となっている。

表 2 慣用表現における「心」の意味

	カテゴリー	個数	割合	慣用表現
1	心情	29	36.3%	心を打つ、心を鬼にする、心が洗われる、心が重いなど
2	気持ち	8	10.1%	心が動く、心が躍る、心が騒ぐ、心が沈むなど
3	注意	6	7.5%	心を致す、心に移す、心を奪われる、心を留めるなど
4	関心	5	6.3%	心を傾ける、心をそそる、心を掴む、心を引くなど
5	愛情	4	5%	心に移す、心を惹かれる、心を寄せる、心が惹かれる
6	記憶	4	5%	心に刻みつける、心に刻む、心に留める、心に残る
7	本心	4	5%	心を引く、心を開く、心がこもる、心にもない
8	努力	3	3.8%	心を傾ける、心をこめる、心を尽くす
9	用心	3	3.8%	心を置く、心を許す、心置きなく
10	度量	2	2.5%	心が狭い、心が広い
11	神経	2	2.5%	心を痛める、心を砕く
12	配慮	2	2.5%	心を配る、心を用いる
13	覚悟	1	1.3%	心を決める
14	期待	1	1.3%	心に適う
15	希望	1	1.3%	心が折れる
16	気力	1	1.3%	心が挫ける
17	精神力	1	1.3%	心の糧
18	熱意	1	1.3%	心を入れる
19	望み	1	1.3%	心に任せる
20	満足	1	1.3%	心ゆくまで
		80	100%	

表 2、つまり、今回調査した慣用句の用例から明らかになったことは次の通りである。上位の 4 語、すなわち、「心情」「気持ち」「注意」「関心」が意味領域の 60%を占め、数えて 48 句の慣用句における「心」の意味カテゴリーとなっている。それらに続き、複数の慣用句の意味カテゴリーになっているのが「愛情」「記憶」「本心」「努力」「用心」「度量」「神経」「配慮」の 8 語である。これら 1 番から 12 番までで、意味領域の 90%を占めており、数えて 80 句中 72 句の「心」の意味カテゴリーとなっている。残りの 13 番～20 番のカテゴリーはそれぞれ 1 つの慣用句の意味になっているだけで、「心」の意味領域においては周辺的なものと言えよう。

4. 慣用表現における「気」と「心」の意味領域の比較

本節では、「気」と「心」の意味領域を対照的に考察し、共通点と相違点を探る。2 節と 3 節で合わせて慣用句 164 句（意味領域のカテゴリー数は 171）を分析した結果、「気」と「心」の意味領域には合計 35 カテゴリーの概念が含まれることが明らかになった。表 3 に抽

出された全カテゴリーを示す。カッコ内の数字はそれぞれの意味カテゴリーを持つ慣用句の数である。

表3 慣用表現における「気」と「心」の意味

№	「気」	「心」
1	心情 (23)	心情 (29)
2	気持ち (12)	気持ち (8)
3	注意 (10)	注意 (6)
4	気分 (7)	-
5	配慮 (5)	配慮 (2)
6	意欲 (4)	-
7	関心 (4)	関心 (5)
8	意識 (3)	-
9	気性 (3)	-
10	好み (3)	-
11	こだわり (2)	-
12	自信 (2)	-
13	良心 (2)	-
14	活気 (1)	-
15	感覚 (1)	-
16	気合 (1)	-
17	期待 (1)	期待 (1)
18	希望 (1)	希望 (1)

№	「気」	「心」
19	興奮 (1)	-
20	実力 (1)	-
21	心的禁断領域 (1)	-
22	性格 (1)	-
23	望み (1)	望み (1)
24	用心 (1)	用心 (3)
25	-	愛情 (4)
26	-	記憶 (4)
27	-	本心 (4)
28	-	努力 (3)
29	-	度量 (2)
30	-	神経 (2)
31	-	覚悟 (1)
32	-	気力 (1)
33	-	精神力 (1)
34	-	熱意 (1)
35	-	満足 (1)

4.1 共通点

全 35 カテゴリーのうち、「心情」「気持ち」「注意」「関心」「配慮」「用心」「希望」「望み」「期待」の 9 語が両者に共通して見られる。この 9 つの概念が全体の 67%を占め、残りの 33%は他の 26 の概念に分散している。ここから、慣用表現における「気」と「心」の意味領域は 70%近くが共通していることがわかる。さらに、この共通の意味領域の中で「心情」(52)、「気持ち」(20)、「注意」(16)、「関心」(9)、「配慮」(7)の 5 語が「気」と「心」のいずれにおいても複数の慣用句の意味カテゴリーとなっており、全体の 64%を占める。つまり、これらは「気」と「心」の意味的な共通領域の中で重要な概念だと言えるだろう。

4.2 相違点

全 35 カテゴリーの 30.7%を占めている、「気」と「心」のどちらかの慣用句にしか見られない 26 の意味カテゴリーは以下のとおりである。A は複数の慣用句に見られるもので、B は一つの慣用句にしか見られないものである。

《気》

- A. 「気分」「意欲」「意識」「好み」「気性」「こだわり」「自信」「良心」
 B. 「感覚」「活気」「気合」「興奮」「実力」「心的禁断領域」「性格」

《心》

- A. 「愛情」「記憶」「本心」「努力」「度量」「神経」
 B. 「覚悟」「気力」「精神力」「熱意」「満足」

「気」と「心」のどちらかの慣用句のみに見られるということは、「気」と「心」にそれぞれ独特の意味カテゴリーだということである。以下では、複数の慣用句に見られる A の意味カテゴリーを対象に、慣用表現における「気」と「心」の意味領域の相違点を考察する。

谷口（2003）は、「気」と「心」が「長さ」「広さ」「大きさ」「高さ」「深さ」「丸さ」「太さ」の 7 項目（概念）を伴ってコロケーションを成しうるかどうかを考察し、「「気」「心」とも、一定の形状、大きさ帯びていることが伺える。ただし、心の方は深さの概念にも関与していると思われ、より立体的（容器的）なイメージが感じられる」と結論づけている。そこで、本稿では、「気」よりも「心」のほうが「立体的（容器的）」だという性質の相違が A の意味カテゴリーからも見られるかを考察する。そのために、まず両者の共通の意味カテゴリーにおいてそのカテゴリー自体あるいは「気」や「心」が容器性・立体性を示すものがあるかどうかを考察する。その後、両者に独自の A の意味カテゴリーについて同じ考察を行う。そして、「気」のカテゴリーと「心」のカテゴリーの間において容器性・立体性の有無の偏りが観察されるかどうかを考察する。容器性・立体性の有無については、それぞれの語（意味カテゴリー）の【広】（『広辞苑』第6版）及び【明】（『明鏡国語辞典』第二版）による定義において、その特性を示唆する要素が見られるかどうかによって判断した。このようにして容器性・立体性の有無を考察した結果が表 4～表 6 に示したものである。なお、容器性・立体性を示唆すると考えられる部分は網掛けと波線で示した。

表 4 「気」と「心」の共通の意味カテゴリーにおける容器性

カテゴリー	辞書的定義	容器性
心情	【広】 <u>心の中の</u> 思い。気持。 【明】 <u>心の中で</u> 感じていること。 <u>心の中の</u> 思い。	有
気持ち	【広】 ①物事に対して感ずる心の在り方。感情。 【広】 ②心の置かれている状態。気分。 【広】 ③対象に対してそなえる心のもとかた。きがまえ。 【広】 ④体の状態についての感じ。気分。 【広】 ⑤（前略）自分の心遣いを謙遜するという語。 【広】 ⑥（副詞的に） そうだと思えばそう感ぜられるほどわずかに。ほんのちょっと。幾分。 【明】 ①ある物事や人に対していただく心の状態。気構え。心情。 【明】 ②からだの具合や状況からおこる心の状態。気分。 【明】 ③（副詞的に）ほんの少し。こころもち。	無

注意	【広】①気をつけること。気をくばること。留意。 【広】②危険などにあわないように用心すること。警戒。 【広】③相手に向かって、気をつけるように言うこと。 【広】④心の働きを高めるため、特定の対象に選択的・持続的に意識を集中させる状態。 【明】①気持ちを集中させること。気を配ること。 【明】②悪い事態にならないように用心すること。気をつけること。 【明】③言い聞かせること。忠告。	無
関心	【広】①心にかかること。気がかり。 【広】②特定の事象に興味をもって注意をはらうこと。ある対象に向けられている積極的・選択的な心構え、または感情。 【明】ある物事に心をひかれ、特に注意を払うこと。	無
配慮	【広】心を配ること。心づかい。 【明】よく考えて心を配ること。心づかい。	無
用心	【広】①心を用いること。注意。 【広】②困ったことにならないように予め注意すること。警戒。 【明】悪いことの起こらないように気をつけること。注意。警戒。	無
希望	【広】①ある事を成就させようとねがい望むこと。（中略）。のぞみ。 【広】②将来によいことを期待する気持。 【明】①こうあってほしいとのぞみ願うこと。また、その願い。 【明】②将来に対する明るい見通し。	無
望み	【広】①ながめ。眺望。 【広】②ねがい。願望。希望。 【広】③人望。名望。 【広】④立派な見もの。 【広】⑤将来に寄せる期待。見こみ。 【明】①のぞむ事柄。希望。期待。 【明】②のぞむ結果が得られる見込み。 【明】③人望。名望。	無
期待	【広】将来その事が実現すればいいと、当てにして待ち設けること。 【明】望ましい状態や結果をあてにして、その実現を心待ちにすること。	無

「心情」は「心の中の思い」や「心の中で感じていること」と定義されている。これは、「心情」が「気」や「心」の中に入っている中身であると捉えられていることを示す。従って、「気」や「心」がこの意味カテゴリーとなる慣用句（例えば、「気が重い」や「心を打つ」）では、「気」や「心」が容器性・立体性をもつと判断できる。このような慣用句では、「気」や「心」が換喩として使用されていると考えられる。例えば、「冬は鍋が美味しい」という表現では、鍋という陶器自体が美味しいことを述べているのではなく、その鍋に入っている料理が美味しいことを述べている。つまり、中身の料理ではなく、それと関係する容器に言及する換喩である。「心情」を意味カテゴリーとする慣用句は、中身の「心情」の代わりに容器である「気」や「心」を用いて表現している換喩であると解釈できる。

以上のことから、ここで考察した9語のうち、それらの「定義」において容器性・立体性を示唆する要素が明確に記述されているものは「心情」のみである。ただし、意味カテゴリーの「心情」が慣用句において占める割合は、「気」の場合でも「心」の場合でも最も多く、2位以降のカテゴリーとの差も大きい。ここから、「気」も「心」も、その基本は容器性・立体性をもつと捉えることができる。

次に「気」を含む複数の慣用句において独自に見られた意味カテゴリーの容器性・立体性について考察する。

表5 「気」に独自の意味カテゴリーAにおける容器性

カテゴリー	辞書的定義	容器性
気分	【広】①きもち。心もち。恒常的ではないが比較的弱くある期間持続する感情の状態。爽快・憂鬱など。 【広】②あたり全体から醸しだされる感じ。雰囲気。 【明】①そのときどきの心の状態。そのときの快不快などの気持ち。 【明】②ある状況や雰囲気の中で、だれもが共通してもつ心の状態。	無
意欲	【広】①積極的に何かをしようと思う気持。 【広】②種々の動機の中から或一つを選択してこれを目標とする能動的意志活動。狭義には、当為に対する主観的傾向性即ち…（後略） 【明】ある物事をなしとげようと思う積極的な気持ち。	無
意識	【広】①認識し、思考する心の働き。感覚的知覚に対して、純粹に内面的な精神活動。第六識。 【広】②今していることが自分でわかっている状態。知識・感情・意志などあらゆる働きを含み、それらの根底にあるもの。（後略） 【広】③特に、社会意識または自己意識（自覚）。 【広】④対象をそれとして気にかけること。感知すること。 【明】①自分や周囲の状況などを（はっきりと）とらえる心の働き。また、その働きをなす場所としての心。 【明】②自分や周囲の状況などをそれとして（はっきりと）とらえること。 【明】③①によって得られる、心的な内容。	有
好み	【広】①好むこと。特に興味をひかれること。嗜好。えりごのみ。（後略） 【広】②歌舞伎で、衣装などについての役者の注文、希望。 【広】③時好。流行。 【広】④（「…ごのみ」の形で）そのものを特に好む意を表す。 【明】①趣味や嗜好として好んでいること。また、そのもの。 【明】②ある傾向のものを好むこと。（後略）	無
気性	【広】生まれつきの性情。心だて。気だて。 【明】生まれつきの性質。氣質。	無
こだわり	【広】こだわること。拘泥（こうでい）。 【明】①ささいなことを必要以上に気にすること。 【明】②細かな点まで気を使って価値を追求すること。 【明】③難癖をつけること。文句をいうこと。	無
自信	【広】自分の能力や価値を確信する事。自分の正しさを信じて疑わない心。 【明】自分の能力・価値や自分の言行の正しさなどをみずから信じること。また、その気持ち。	無
良心	【広】何が善であり悪であるかを知らせ、善を命じ悪をしりぞける個人の道德意識。 【明】善悪、正邪を判断し、自分の行いを正しいものにしようとする心のはたらき。	有

「意識」の定義には、「心の働き」という意味と「その働きをなす場所としての心」という意味がある。前者では「気」＝「心の働き」ということであり、後者では、「気」＝「働きの場所」ということである。つまり、後者は「気」の容器性を示している。また、別の「心的な内容」という定義は、「意識」が「気」の中身であること、つまり、「気」に容器性があることを示唆する。

「良心」は、「道德意識」と定義されている。上で述べたように、「意識」自体が「心的な内容」であることから、「道德意識」である「良心」も「心的内容」の一つと考えることができる。そうすると、例えば、「良心」を意味カテゴリーとする「気が咎める」という慣用句では、中身の「良心」の換喩として容器の「気」が使用されていると分析できるだろう。

以上のことから、「気」に独自の意味カテゴリー8語のうち、「意識」と「良心」の2語のみが容器性・立体性を示すことがわかった。さらに、「良心」は「意識」の一種なので、「気」の容器性・立体性を示すのは、実質的に「意識」という一つの（上位）カテゴリーのみだと言ってもよいだろう。

最後に「心」を含む複数の慣用句において独自に見られた意味カテゴリーの容器性・立体性について考察する。

表6 「心」に独自の意味カテゴリーAにおける容器性

カテゴリー	辞書的定義	容器性
愛情	【広】①相手に対して向ける愛の気持。 <u>深く愛するあたたかな心</u> 。 【広】②異性を恋い慕う感情。 【明】①人やものに <u>注ぐ</u> 温かな気持ち。慈愛。 【明】②異性を恋い慕う気持ち。恋愛の情。	有
記憶	【広】①物事を忘れずに覚えている、または覚えておくこと。また、 <u>その内容</u> 。ものおぼえ。 【広】②⑦生物体に過去の影響が残ること。 ④物事を記録し、それを保持し、さらに後で想起すること。将来の行動に必要な情報をその時点まで保持すること（未来記憶）も含む。 【広】③コンピューターで、必要な情報を保持しておくこと。 【明】①過去に経験した事柄を忘れずに覚えていること。また、 <u>その内容</u> 。 【明】②コンピューターにデータを保存しておくこと。	有
本心	【広】①もちまへの正しい心。 <u>良心</u> 。 【広】②本気。正気。本性。 【広】③うわべでない、本当の心。本意。 【明】①その人の本当の心。真実の気持ち。 【明】②本来の正しい心。 【明】③たしかな心。正気。	有
努力	【広】目標実現のため、心身を労してつとめること。ほねをおること。 【明】ある目的を達成するために、気を抜かず、力を尽くして励むこと。	無
度量	【広】①長さと同積。 【広】②尺と <u>拵（ます）</u> 。 【広】③心が <u>広く</u> 、人をよく <u>うけいれる</u> 性質。 【明】①物差しと <u>拵（ます）</u> 。また、長さと同積。 【明】②人の言行を <u>受け入れる</u> 寛大な心。	有
神経	【広】①中枢の興奮を体の各部に伝導し、または体の各部からの刺激を中枢に伝導する線維が束になったもの。末梢に向かうにつれ分枝し、また吻合しながら細くなる。 【広】②物事に触れてよく気がつく心のはたらき。また、気にしすぎること。気に病むこと。 【明】①体の各部位の機能を統率し、刺激を伝達したり、受けた刺激を中枢に伝達したりする系状の器官。 【明】②外界の物事に反応する心の働き。また、過敏に働く感覚的作用。	無

「愛情」の定義にある「深く愛するあたたかな心」から次のようなことが示唆される。まず、「深く愛する」ということから、愛(すること)には深さがあり、立体性を示唆する(cf. 谷口 2003)。「深く愛する」ことが「心」そのものであっても、「心」の内容であって、該当する慣用句における「心」は容器性・立体性をもっていると言えるだろう。また、「深い愛情」といえることから、その立体性がうかがえる。さらに、「注ぐ」も「川が海に注ぐ」「田に水を注ぐ」などのように使われることから、注ぐ主体である「愛情」ひいては「心」は量的なもの、つまり、立体的なものであると考えられる。

「記憶」は「覚えていること」を示し、そして、その「内容」を表すこともある。両者の関係は、容器と中身に相当するだろう。「記憶」が「心」の意味カテゴリーとなっている場合、「心」は内容が入る容器としての記憶として解釈される。

「本心」には、「良心」という意味がある。「良心」は、先の「気」の意味カテゴリーになっており、そのカテゴリーは「気」の容器性を示すと論じた。従って、「本心」を意味カテゴリーとする場合の「心」も容器性をもつことが示唆される。

「度量」は、定義に「広い」(cf. 谷口 2003)、「升」、「受け入れる」という言葉が見られることから、このカテゴリー自体が明らかに容器性を示すと言えるだろう。したがって、その性質を持つ「心」は容器性を持つことになる。

以上のことから、「心」に独自の意味カテゴリー6語のうち、半数以上の4語がそれ自体が容器性・立体性をもつか、内容物としてその入れ物である「心」の容器性・立体性を示すことがわかった。

この節では次のことが明らかになった。まず、「気」と「心」の慣用句に共通し、もっとも多い割合を占める意味カテゴリーの「心情」は容器性・立体性をもつ。つまり、慣用句における「気」も「心」も、その基本は容器的・立体的であると言える。ただ、この「心情」は「気」の意味領域の25.3%を占めるのに対し、「心」の場合はその36.3%も占めている。これは、「気」よりも「心」のほうが容器性・立体性が強いことを示唆する。一方、複数の慣用句に見られる、「気」と「心」それぞれに独自の意味カテゴリーについては、「気」の意味カテゴリー8項目のうち、容器性・立体性が認められるものは2項目(25%) (実質的には1項目)であるのに対し、「心」の意味カテゴリー6項目のうち、容器性・立体性の認められるものは4項目(67%)見られる。この考察から、「気」よりも「心」のほうが容器的・立体的なイメージが強いことが明らかになった。この点は、谷口(2003)の主張と一致している。さらに言えば、本稿の冒頭で述べた「「気」から見れば「心」は見えるが、「心」から見ても「気」は見えないものなのか」といった疑問への答えにもつながる。すなわち、それぞれが独自に意味カテゴリーを示す場合は、「心」は立体性があるため、「気」から見えるのに対し、「気」は立体性があまりないため、「心」から見えにくいのだろう。

5. まとめと今後の課題

本稿では日本語の「気」と「心」の意味領域を、それぞれを含む慣用表現を通じて考察し、その共通点と相違点を明らかにすることを試みた。「気」を含む慣用表現 87 句、「心」を含む慣用表現 77 句を考察した結果、「気」と「心」は、少なくとも慣用表現から見られるそれぞれの意味領域において 70% 近くの割合で共通しており、その共通の意味領域の中でも「心情」「気持ち」「注意」の3語が 75% を占めていることがわかった。「心情」と「気持ち」がもっとも多くの慣用句における意味カテゴリーになっていることは、さほど不思議なことではないが、「注意」が3番目に多いことは予想外だと言ってもいいかもしれない。また、「心情」の意味カテゴリーがもっとも多くの「気」と「心」の慣用句に見られたことから、両者は基本的に容器的・立体的であることが分かった。一方、相違点については、「気」と「心」のいずれにしかない意味カテゴリー26のカテゴリーのうち、複数の慣用句において見られる14語を対象に考察したところ、谷口（2003）が主張した「心」は「気」より容器的・立体的なイメージが感じられるとの主張に沿うような結果が出た。さらに、辞書の定義において「気」の項目には「心」が数多く見られるのに対し、「心」の項目には「気」がほとんど見られないこと理由は、両者間における容器的・立体的性の差によるものではないかという推測にも至った。本稿では、意味カテゴリーの定義に焦点を当てて、「気」と「心」の類似点や相違点を考察したが、今後は、慣用句の実際の使用例をさらに収集し、それらが用いられている文脈も考慮に入れながら、今回明らかになったことを検証していく必要がある。

【参考文献】

- 王珍妮（2009b）「日本語の「心」に関する慣用表現の意味分析－「気」を含む慣用表現との対比を通じて－」『奈良女子大学人間文化研究科年報』24, pp. 37-50
- 江ミーシン（2010）「「気」の意味研究－上代を中心に－」『第8回日本語教育研究集会予稿集』, pp. 18-21, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 谷口秀治（2003）「コロケーションからみた類義語の意味分析－「気」と「心」を中心に－」『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第49巻, pp. 750-755, 中国四国教育学会
- 戸田利彦（1998）「「気」の慣用表現に関する研究（I）－定義と分類をめぐって－」『日本語文化研究』1, pp. 1-12, 比治山大学日本語文化学会
- Otgonjargal, Dolgion (2023) 「日本語の「気」と「心」および モンゴル語の sanaa と setgel を含む慣用表現について」大阪大学大学院言語文化研究科修士論文
- 方小賛（2009）「日本語と中国語における「気」の比較－基本義、意味拡張、文化の観点から－」『比較文化研究』88, pp. 97-107
- 方小賛（2010）「日本語と中国語における「心」の比較－意味拡張、概念メタファーの観点から－」『比較文化研究』93, pp. 197-207

【定義・用例出典】

- 【広】新村出（編）（2008）『広辞苑』（第6版）岩波書店
- 【明】北原保雄（編）（2012）『明鏡国語辞典』（第二版）大修館書
- 【日】日本国語大辞典（精選版）
- 【こ】ことわざ・慣用句の百科事典 (<https://proverb-encyclopedia.com/>)
- 【ツ】ツールでなるほど慣用句辞典 (<https://imidas.jp/idiom.html>)
- 【デ】デジタル大辞泉 (<https://dajjisen.jp/digital/>)